

## 第3章 漢方の力

## ◆東洋医学と西洋医学の考え方の違い

ここでは、具体的な症例をあげて、東洋医学と西洋医学の考え方の違いをわかりやすくご紹介します。

症例は、31歳の女性、主婦で授乳婦です。

明るく、責任感が強い性格で、大学卒業後、外資系企業に就職し、仕事は確実にこなすタイプでした。体力には自信があり、忙しくても、週末に休めば回復する、体力のある方です。30歳で結婚し、その後、妊娠、出産。臨月間近より疲れやすくなり、ボーンとすることが多くなりました。

出産後、子どもの世話がおっくうになったり、気分が沈みがちになったりすることがあり、時おり、のどから胸にかけてものが詰まったように、息苦しく感じる。夜間の授乳によりやや睡眠不足とのことでした。

この患者さんは、漢方の考え方という〈気うつ〉の状態と考えられました。そこで、〈気うつ〉に対する処方である「半夏厚朴湯(はんげこうぼくとう)」を処方したところ、2週間で効果が現れ、3カ月ほど飲み続けたところ、明るさと元気を取り戻しました。

この〈気うつ〉とはどのような状態かという、漢方では人間には〈気・血・水〉という3つの大きな要素があると考えられ、この3つが滞ることなく体を巡っている状態が健康であると考えられます。

〈気うつ〉という病態は、〈気〉がどこかで滞ったときの状態と考えられます。

この〈気うつ〉の状態を解説すると、健康な状態では、〈気〉がグルグルと巡っているのですが、これがどこかで滞ります。

〈気〉が滞るパターンとしては、たとえばのどの辺りで滞るような状態を想像してみてください。この場合、どういう症状が出るかという、咽喉頭異物感という何かものがつかえたような感じが現れます。のどに何かつかえて、飲めども飲めず、吐けども吐けず、といったような状態です。また、胸の辺りで滞ったときは、息苦しい感じや、胸の違和感が現れます。

頭部でうっ滞している場合には、不安感、抑うつ、不眠といった症状が現れます。さらに、おなかでは空気や気体などガスとしての気がうっ滞するため、腹部膨満感のようにおなか張るといった症状が出てきます。

いずれも〈気うつ〉のパターン認識に関わる症候です。

一般にはこうした気のうっ滞は体のいろいろなところで同時に起こり、症状はさまざまと考えられますが、のどがおかしいという方は、のどのことしか訴えてくれないものです。

このため、のどのつかえ感の原因が気うつかなと思ったら、接客時には、「息苦しくないか」「不安感や抑うつ気分はないか」「おなかの張りはないか」など、状態をより詳しくヒアリングすることが大切です。

とくに、お客様にしてみると、のどがおかしいと相談した場合に「息苦しいか」「不安感はないか」など聞かれることはほとんどないと思われるので、そうした販売側の専門性が

お客様に良い意味でのプラセボ効果をもたらす可能性もあります。

そして「気うつ」のような、症例にもあったような「半夏厚朴湯(はんげこうぼくとう)」や「柴朴湯(さいぼくとう)」などを提案する、これが漢方の考え方です。

以上のように、お客様が訴える症状は全体の1つであって、お客様の主訴をきっかけにその背景にある原因に迫るというのが、漢方の考え方です。

一方、西洋医学の対応はというと、のどにものがかえっている感じがあるなら耳鼻科、息苦しさなら呼吸器科、抑うつには心療内科とか精神科、おなかは消化器科などで対応します。各症状がひどくないために、「不定愁訴」扱いになり、効果的な治療が得られないかもしれません。

こうしたとき、漢方の視点をもっていると、不定愁訴だと決めつけずに、典型的なく気うつ」の症候ではないかと気づくことができるのです。これがもう1つの医学を学ぶことの大切さです。

---